

フーゴー・レッチャー

『強盗立ち入り禁止』

訳 深谷 佳那

禁止事項、それは私が読み飛ばしたくないものだ。ゆえに私はそれらを集める。おおよそ禁止事項の名作選の為に。私はもちろんただ最も美しい禁止事項のみを手に入れたときには、「これをしてはいけません」で始まるようなうんざりするくらいよく知られたものを手にすることはないだろう。

禁止事項、それは禁止しようとした人が何かしら思案したものだ。フランス人批評家でパリの文学共和国の黒幕、ジャン・ポーランがとある著書のきっかけにした禁止事項でもって、私は選集を始めた。次のようなものだ。

「！禁止！ 公園への花束の持ち込みは禁止しています」

これは、単純なものではない。というのもこれは、花の採取を禁止しているからだ。花束を公園へ持ち込むことを禁止されたなら、公園を出る際、入ったときから花束を持っていたと主張することはできなくなる。花を持ちこむこと、そして花を摘むことが同時に禁止されているのだ。

私が集めている禁止事項の一つに、チューリッヒの謝肉祭に間に合うように公布されたものも含まれている。仮面をかぶっている人はお祭りの間、郵便局や銀行に入ることを禁止されているのだ。その禁止事項は考察する価値がある。

その禁止事項の驚くべきことは、まず、誰もそれについて驚かないということだ。10年以上前だと、このような条令はただ首をかしげさせたただけだっただろう。しかし、その間に私たちは大いに進歩した。地元の人間の強盗も

外国人の強盗も、私たちの中にいるのだ。

つまり、謝肉祭のときに銀行や郵便局で盗みをはたらこうという者は、仮面を着けたまま強盗をしてはいけない。従来のやり方に戻らなければならない。まず、ロビーでストッキングや目出し帽を被るか、もしくはシカゴ式短機関銃をバイオリンケースに入れて持たねばならない。音楽家はさしあたり銀行に立ち入ることを禁止されていないのだ。とはいうものの、定評のある方法で悪だくみをするのも問題がないわけではない。こんな話が知られている。

少年が音楽の時間にバイオリンケースを開け、その中に自動小銃を見つけて大声を上げた。なぜなら、その父はバイオリンを持って銀行窓口に立っていたからだ。

ところで他方では、どの強盗も必ず謝肉祭の間に銀行で盗みをはたらこう、という訳ではない。強盗は存分にお祭りを楽しみ、謝肉祭が明けた灰の水曜日にまた人生の厳しさを自覚することも、私は考え得る。

しかし、カレンダーには他にも仮装が問題になる日がたくさんあるのだ。

ゼクセロイテン¹のときはどんな状況だろう？ そのときシャイフ²の服装の人が銀行や郵便局に行ったなら、その人物が身分の高いチューリッヒの組合のメンバーに関係しているのか、強盗に関係しているのか、どのように判断できるというのだろう。

では、5月1日のメーデーはどうだろう？ プチプルが赤いバッジや合言葉と共にそこで一日中プロレタリアのふりをしているときは？

すると、12月6日は？ その日には最近、聖ニコラウスの装束の者によって盗まれる事件がなかったか。その者は袋をクリスマスプレゼントでいっぱいにしたバーリ市のニコラウスではなかったのだ。

銀行や郵便局強盗をめぐる法律はまだ十分に考えつくされていない、と見てとれるだろう。

例えばある点において、変更は立ち入って議論されていない。人は窓口の前からだけでなく、窓口の向こう側でも銀行の金を奪うことができるのだ。スイスにおける最も新しい銀行の訴訟は、いかに銀行は簿記室や会計課

を経て金銭を取られうるのかを指し示している。またこれは謝肉祭の期間中だけではない。その際確かに、この強盗は仮面をせず、また人がいないときに来なかったのではなくて、勤務時間であったのだということを付け加えないといけない。

他方、銀行の中で盗みを働こうという強盗の立ち入りが禁止されているにすぎない。外国で盗みをはたらく強盗は、依然として銀行に足を踏み入れ得るのだ。こういった強盗が全ての国民の持ち物を丸ごと略奪するときまで。もはや一様である——この強盗はあたかも世間一般の人間としてありきたりにやってくる。もしくは一般的な人の着る一般的な背広は、おおよそまた仮面として判断されるべきなのだろうか。

Hugo Loetscher, “Zutritt für Räuber verboten”, S. 99-102, in: ders., Der Waschküchenschlüssel, oder Was – wenn Gott Schweizer wäre, Zürich: Diogenes, 1988, (detebe 21633)

注

- 1 ゼクセロイテン……4月の第3月曜日にチューリッヒで行われる春を迎える祭り。
- 2 シャイフ……アラビアの指導者の装束。